



TITLE:

[書評] Jenny Edkins and Nick Vaughan-Williams, 『Critical Theorist and International Relations』 Routledge, 2009.

AUTHOR(S):

天野, 恵美理

---

CITATION:

天野, 恵美理. [書評] Jenny Edkins and Nick Vaughan-Williams, 『Critical Theorist and International Relations』 Routledge, 2009.. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2010, 12: 139-144

ISSUE DATE:

2010-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/97990>

RIGHT:

## 書評

Jenny Edkins and Nick Vaughan-Williams  
*Critical Theorist and International Relations*  
Routledge, 2009.

天野恵美理

### 1. 編集方針——リゾーム的読みの促進

本書は、32人からなるさまざまな思想家の考えを、「国際関係 (international relations)」の視点から捉え直そうとするものである。

前書きによれば、本書の編者はこのプロジェクトを立ち上げた当初、多様性を重視して、まったく異なるさまざまな思想家の学説を集めた論文集を作ろうとした。しかし、いずれ編者は、諸思想家の相異なる学説というよりむしろ、彼らのあいだに共通の関心事とそれに取り組む仕方との、複雑な絡み合い (web) を見ることになる。そしてこのことは、9.11以降の国際社会において特に顕著となっている問題、すなわち、異なっていて相容れない他者とのあいだの思考の緊張、そしてそれゆえの困難な選択、というカリカチュアを覆した。それは編者にとって予想されない出来事であった。

この本はランダムに読まれたいと、編者は言う。偶然の出会いを促進したいのだと。読者は好きなところから始めて、好きなところで終わりにしてよい。本書には、前もって用意されたツリーの構造はないのである。編者が奨励するのは、だから、リゾーム的な読み方である。リゾームはつねに事物の中心にあって関係性を構築しつつある。そしてリゾーム的な読みの射程は、一冊の本がカバーできる領域を超えて広がる。こうして、ある思想と、小説、映画、さらには日々の経験との邂逅がなされることを、編者は期している。言うまでもなく、そのような邂逅は編者にとって未知のものであるのだが。

よって、編者によれば、タイトルにある international relations という語に込められた意味合いは、先に挙げた広がりをも含意するような、とても広大で膨張力のあるものであって、国際政治／国内政治という安易な区別や、それに基づく国際関係、といったものを指し示すのではない。むしろ、本書を通じて、安易な区別や安易な意味付けを批評する視点が議論されている。

こうした方針のもと、扱われる思想家はアルファベット順に配列されている。それ以外の方法は、カテゴライズを必要とし、思想の混沌に、一貫性という既成の政治的枠組みを押しつけることになるからである。

さて、本書にはカントやマルクスといった代表的な、また歴史的とも言われる哲学者が名を連ねているが、本書評では、まず、未曾有の他者との遭遇を喫した 9.11 テロ以降の国際政治、すなわち本論文の中でも比較的アクチュアルな国際政治という観点から、ジュディス・バトラーについての章を取り上げる。次に、本書の思想的核心を巧みに表していると思われる、ドゥルーズについて書かれた章を扱う。というのも、ツリー／リゾームといった言葉からも伺えるように、上で見てきたような編集方針は、ドゥルーズの哲学に大いに帰するところがあるように、評者には思われるのである。よって、本書評では、クリスティーナ・マスターズによってバトラーについて論じられた章と、ロビン・デューリーによってドゥルーズについて論じられた章とを、中心的に見ていくことにする。

## 2. バトラーの判読不能性

ジュディス・バトラーは、その主著『ジェンダー・トラブル』によって、「哲学・文学ジャーナル」から、その年のナンバーワン・バッドライターとして指名された。というのも、彼女の著作は大変難解で分かりにくいのである。彼女の著作のうちでも、特にジェンダーとセクシュアリティに関わるものは、どんなに理解しようとしても、学問のディシプリンにとってむしろ判読不能なものままだに留まっている。しかし、言語が根本的に主体の形成に関わっているというまさにその理由で、彼女の著作は言語に対しても挑戦的でなければならなかった。彼女は主体として存在できない、阻害された生を照らし出そうとしたのだから。

当時多くのフェミニストやポスト構造主義者の間で問題となっていたのは、ジェンダーの構成物としてのみ女性が存在するとき、女性について、ではどのように語ることができるのかということであった。つまり、ある支配的な語り (narrative) から別の語りへの交代が引き起こしうるリスクが問題となっていたのである。支配的な語りは女性をへりくだらせ貶め続けてきたものであるが、別の語りというのは、女性、すなわち主体の死であって I とか we などと発することを締め出すもの、についてはまったく語ることができないようなものであった。こうして、政治の領域において女性がどこにも前提されないようになるリスクが必然的であるように思われた。このリスクを回避しようとした結果、セックスとジェンダーとの何らかの繋がりをなお保ちながら、ジェンダーは社会的に構成された論弁

的 (discursive) なもの、セックスは生物学的カテゴリーの指示するもので論弁以前のもの、としてそれぞれ理解することで、セックスからジェンダーが分離された。

しかし、バトラーによれば、こうした区別は、セックスの区別を決定的なものとしてしまい、疎外の対象をあらたに創出してしまう。すなわち、もし、男／女の区別において解剖学的に矛盾した身体をもって生まれてきたときには、何が起こるのか？その人の生は生きるに値するものなのか？だから、バトラーによれば、男／女という二分法的区別を攻撃するためには、セックスという自然化されたカテゴリーが問いに付されないままに留まっている以上は、ジェンダーが文化的に構成されたと主張するだけでは片手落ちであって、セックスをも批評の対象とせねばならないのである。ジェンダーが文化的に構成された、相対的なものであるのに対して、セックスは自らは絶対的であると主張するかのような、暴力的で、排他的な側面を持つのであり、この側面こそがバトラーを、区別そのものを瓦解させることへと導くのである。

バトラーにとって、セックスとは、権力と知識の秩序によって、二分法的区別を身体的な特徴付けとして、すなわち物質的なものとして具体化するプロセスにおいて生じる、単に遂行的 (performative) な結果である。その遂行性 (performativity) は、主体性を繰り返し創造すると同時に動揺させるものであるので、主体性はつねに生成途上にあり、主体性の裂け目、不安定性はつねに曝されている。重要なのは、主体の裂け目というのが両義性をもつことである。すなわち、セックスを遂行的な結果と見なし、主体を不安定性のうちに位置づけることは、一方では主体性あるいはアイデンティティを危険に晒すとともに、他方では、特に現状において主体とみなされていない存在にとっては、それらがより生きるに値する生を要求することへの、根源的な可能性をも開くものである。

さて、このような、遂行性に基づく、つねに生成途上にあって不安に晒されている主体は、公的、一般的な言明からはほど遠いものである。ここにバトラーの理解しにくさ (unintelligibility) がある。さらに、この遂行性は、9.11 テロによるトラウマを経て、その内実が、攻撃されてもやり返さずに傷ついたまま留まることを提唱する「哀悼の政治学」へと受け継がれてゆく。

アメリカの「テロとの戦い」においては、テロとの戦いの後に実現すると信じ込まれているあり方も、また、テロとの戦いがその人たちのためになされているとされるどころの、テロによって被害を被った人々のイメージも、リアリティーのあるものではない。前者、すなわち得られるべきものに関しては、アフガニスタンにおいて、一見したところ平和が訪れるようになるにつれて女性の姿も見られるようになるというイメージが信じ込まれて

いるが、しかし逆説的なことに、実際には女性の姿がますます見られなくなるという鋭い考察が述べられている。というのも彼女たちは、平和な社会における明朗な女性、という、メディアが描く彼女たちに対するイメージの単純さによって、生そのものに不可避である複雑さ、すなわち彼女たちが現実の生においてどのような人物であるか、またどのような人物になりうるか、ということが度外視されて、その複雑さを骨抜きにされることを強いられるようになってきたからである。また、後者、すなわち失われたものに関しては、アメリカは、9.11 テロの犠牲者の喪に服する間もなく、「テロとの戦い」に突入したが、そのような状況下での、喪失についての公的な語りは、アメリカの覇権の喪失といったような、想像上の喪失に対するものであって、失われた現実の命に対するものではない。実際に、「テロとの戦い」の煽動によって、その日失われた現実的な命についてのトラウマは、隠された。そのような現状に対して、バトラーによれば、前者についても後者についても、われわれがなお人間らしくあるためには、われわれは言語やイメージによって固定されない、現実的な生に目を向ける必要があるのである。

対象が同性愛者であれ戦争の犠牲者であれ、バトラーの仕事は一貫して、中心的な政治の安易な分かりやすさの裏で、ひっそりとそこから締め出されている人々に、なお生きるに値する生を回復しようとするにあるのであって、支配的言説の一見した分かりやすさに歯向かって、他者の、生の、そして自分自身の、現実的な不透明性に目を向けさせようとするものである。

### 3. ドゥルーズの問題

ロビン・デューリーによれば、ドゥルーズは、「その領域内で哲学者が概念を作り出す理論的な環境は、それ自体、その哲学者特有の問題によって規定されている」(p. 126)、ということを確認している。さて、この問題というのは、後述されるように、それが何であるかを、思考によっては正確に捉えることができないものなのであるが、さしあたり、デューリーによれば、「ドゥルーズの仕事は徹頭徹尾、内在性の問題によって規定されている」(ibid.)。では、内在性の問題とはどのようなものか。

内在性の問題にアプローチするために、まず、ドゥルーズが否定した、超越的次元なるものを見てみよう。たとえばプラトンは、われわれの日々の生を、超越的な諸形式との程度の差はあれども不完全な類似 (resemblance) によって説明しようとした。超越的次元においては、このような類似や模倣によって、存在論的、因果的説明がなされる。こうした類似や模倣こそが、ドゥルーズが否定したものである。なぜなら、類似や模倣が促す形式

化においては、その超越的な形式化が見出したものは完全に正しい解決をもたらすかのようと思われる一方で、その一見した「正しさ」にもかかわらず、すべての異なるあり方は同一性に従属するものとして捉えられるにすぎないので、一部のディテールは不当にもその存在を認められないことになるからである。超越的次元においては、問題の解決は、ただ発見されるのを待ちながら、ある意味ではすでに「そこに現れている (out there)」。だから、この場合には、問題は解決の様式 (modality) として理解されている。

そうした見方とは対照的に、ドゥルーズは「思考の新しいイメージ」(p. 130)を提唱する。超越的次元においては、思考は必ず真理への意志と常識とを持ったものだとされているが、そもそもなぜわれわれは考えるのか、何がわれわれに考えることを押しつけるのか、ということが、そこにおいては説明されていない。ドゥルーズはその点を積極的に考えようとするのである。ドゥルーズによれば、われわれが考えることを強制されるのは、思考がある種の暴力に出くわしたとき、考えられることができないもの、それでもって思考が通常作動するところの諸概念を受け付けられないものに直面したときである。そして、そのような場合、そこで出くわすものは感じられることしかできない。その邂逅は感受性の出来事であり、思考は感受性を通じて呼び覚まされる。感受性が、思考に、問題を抱くようにと強制するのである。一方で、思考は、自らが何に直面しているのかを、正確に認識することができない。このようにして思考が触発されることが、ドゥルーズ言うところの内在性の問題である。感受性に基づくこの内在性の次元は、それ自体の外部にあるものとの類似によって推し量られる超越的な次元とはまったく異なるものであることがわかる。

さて、ではこうしたドゥルーズの思想が、international relations や政治理論にどのような影響を及ぼしうるか。感受性とともに移ろうものである内在性の観念は、人々が、中国の河川沿いに栄えた農耕文明のように、土地に縛り付けられ固定的な役割を果たしてきたのとは対照的に、自由に、すなわちノマディックに (nomadically) さまよい動くことができるスムーズな空間の観念へと適用される。そしてノマドを導くのはもっぱらその場、その時についての「感覚」だけであるが、この感覚は移ろいゆくがゆえに唯一無二のものなのである。

国家が官僚的な秩序を押しつけてくるのに対して、ノマドの集まり (assemblages) は流動的で、自己組織的な傾向を持つ。デューリーによれば、この自己組織的な傾向こそが、ドゥルーズの内在性の哲学の、もっとも顕著な政治的帰結である。

#### 4. 講評

政治は、とにかく行政の機能と混同されやすいように思われるが、本書が全体を通して示すように、政治とは、深い思索との繋がりを持ったより根源的なものであろう。行政の機能に対してはある程度の固定性が不可避免的に要求されるが、政治はその深部において、思索と連携し、つねに動きうる。そして、今まで光が当てられていなかった政治の局面に光を当て、世界の見え方を一変させてしまうようなことこそ、**international relations** のはたらしきであろう。

本書は、哲学と政治とのあいだを、自らの感覚に則って自由に動く、その動き方の手引きとなるのではないだろうか。本書の可能性は、読者に託されていると言える。

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕